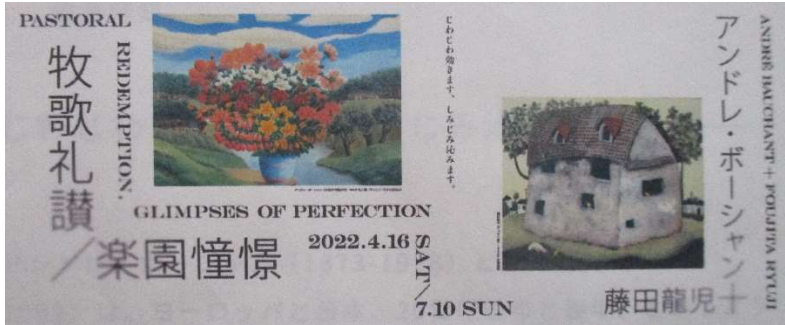


牧歌礼讃/楽園憧憬 アンンドレ・ポーシャン+藤田龍児

東京ステーションギャラリー 2022.04.16~07.10



「アンンドレ・ポーシャン」(1873~1958)と「藤田龍児」(1928~2002)は、ヨーロッパと日本、20世紀前半と後半というように、活躍した地域も

時代も異なるが、共に牧歌的で楽園のような風景を自然への愛情を込め描き出した画家である。

本展では、人と自然が調和して暮らす世界への憧憬に満ちた彼らの作品は、色や形を愛で描かれた世界に浸るといふもので、絵を見ることの喜びを起こさせてくれる代表作を含む「計116点」が展示されている。

アンンドレ・ポーシャン	《川辺の花瓶の花》	1946年	上図左
藤田 龍児	《デッカイ家》	1986年	上図右

アンンドレ・ポーシャン 《異国風の庭にいる人々》 1950年



画伯が描いた作品は、山や川、草原や丘、そこに生い茂る木々や咲き誇る花など馴染みのある故郷の風景、植物の生き生きとした姿である。

そうした絵の中にしばしば神話や歴史の登場人物が描き込まれ、深い愛情を感じさせる自然描写と素朴でどこか不自然な人物表現の取り合わせには、そこはかとない味わいがある。

藤田龍児 《啓蟄》 1986年



初期の「藤田」は、抽象性の強い幻想的な作品を描いていたが、大病に罹患して利き腕が動かなくなったが、左手に絵筆を持ち替えて再スタートした。

大病後にはうって変わって、親しみ易い閑静な風景を描くようになり、広い野原や連なる山並みの見える郊外、古い街並みやのんびりした田舎町などが舞台となり、そこに電信柱や工場の煙突、鉄道、バス停などが描き込まれ、人物は点景として、白い犬と共に趣を添えている。